京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

2025　年　4　月　7　日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　藤　　洋 作　様

所 属 部 局　人間・環境学研究科

職　　名　准教授

氏　　名　堀口大樹

助成の種類	**令和6年度　・　研究活動推進助成**		
申請時の科研費研究課題名	ロシアによるウクライナ侵攻以後のラトビアの言語状況の総合的研究		
上記以外で助成金を充当した研究内容	ロシアによるウクライナ侵攻以後のウクライナとロシアのスポーツ・ディスコース		
助成金充当に関わる共同研究者	(所属・職名・氏名)		
発表学会文献等	Daiki Horiguchi (2024) Language Issues in Ukrainian Sports Media during Wartime. *Półrocznik językowy Tertium*. 9(1), 130-155. 堀口大樹(2025)「ラトビアの言語景観におけるロシア語とウクライナ語」『スラヴ学論集』28号、136-138.		
成果の概要	**研究内容・研究成果・今後の見通しなどについて、簡略に、A4版・和文で作成し、添付して下さい。(タイトルは「成果の概要／報告者名」)**		
会計報告	交付を受けた助成金額	700,000 円	
	使用した助成金額	700,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	費目	金額
		旅費	558,250
		書籍	92,815
		学会参加費	27,395
		ハードディスク費	19,700
		海外出張時のSimカード費	1,805
		その他	35
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今後の研究の発展につながる調査や研究ができたことをここに感謝します。		

成果の概要 / 堀口大樹

研究内容

本研究では、2024 年 9 月 17 日から 22 日にラトビアの首都リーガにおいてウクライナ避難民 24 名のインタビュー調査を行い、ウクライナ避難民から見たラトビアの言語状況と、ウクライナとラトビアにおける彼らの言語使用や言語観について、主にウクライナ語で聞きとり調査を行った。平行して、戦争がラトビアの言語景観に及ぼす影響を調査した。

またウクライナ侵攻以後のウクライナとロシアにおけるスポーツメディアを分析し、戦争が言語イデオロギーや言語使用に及ぼす影響を考察した。2024 年 9 月 23 日にはポーランドで行われた国際学会でウクライナ侵攻以降のロシアのスポーツディスコースについて口頭発表を行った。

研究成果

論文①　堀口大樹「ラトビアの言語景観におけるロシア語とウクライナ語」『スラヴ学論集』28 号、136-138.

2024 年 9 月の実地調査において、公共空間におけるロシア語表示の撤去や、ウクライナ語による避難民向けの表示の最新の状況を報告した。

論文②　Daiki Horiguchi (2024) Language Issues in Ukrainian Sports Media during Wartime. *Półrocznik językowy Tertium*. 9(1), 130-155.

ウクライナのスポーツメディアにおいて、アスリートが語る言語観や言語使用についての発言を質的・量的に分析し、戦時下のウクライナに顕著なウクライナ語優先の言語イデオロギーが反映されていることを明らかにした。

論文③　Daiki Horiguchi（投稿中）Russophobia Frame and Dysphemism in Russian Sports Discourse during Wartime.

2014 年以降ロシアの公式ディスコースにおいて西側諸国を敵視するために多用されているルソフォビア（反露）のフレームが、ウクライナ侵攻以降主要国際大会から除外されているロシアのスポーツディスコースにおいても用いられていることを元に、反露的な行動や発言を行う国際的スポーツ機関や海外のアスリートを敵視する語彙を分析した。

口頭発表　Daiki Horiguchi. Russian sports discourse during wartime: a lexical analysis. Across Borders Ten. ポーランド・クロスノ国立応用科学大学（2024 年 9 月 23 日）

上記の論文③に関する口頭発表である。

今後の展望

ラトビアにおけるウクライナ避難民のインタビュー調査の研究成果を 2025 年度に口頭発表ならびに論文にまとめる予定である。またウクライナ侵攻以降の東ヨーロッパにおける言語状況に関する社会言語学的研究や、戦争を反映する様々なディスコースの言語学的研究を今後も続けていく。